高等学校日语教材

概说日本文化史

主编◎刘小珊　陈访泽

◆岩宿文化◆绳文文化◆弥生文化◆古墳文化◆飛鳥文化
◆奈良文化◆平安文化◆鎌倉文化◆室町文化◆江戸文化

大连理工大学出版社

高等学校日语教材

概说日本文化史

主编◎刘小珊 陈访泽
◎刘小珊 陈访泽 蔡京春 程 亮 唐秀乐

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

概说日本文化史 / 刘小珊，陈访泽主编. —大连：大连理工大学出版社，2010.2

高等学校日语教材

ISBN 978-7-5611-5368-0

Ⅰ①概… Ⅱ.①刘… ②陈… Ⅲ.①文化史—日本—高等学校—教材 Ⅳ.①K313.03

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 018229 号

大连理工大学出版社出版

地址：大连市软件园路 80 号 邮政编码：116023

发行：0411-84708842 传真：0411-84701466 邮购：0411-84703636

E-mail：dutp@dutp.cn URL：http://www.dutp.cn

大连美跃彩色印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸：185mm×260mm 印张：13 字数：295 千字

印数：1～3000

2010 年 2 月第 1 版 2010 年 2 月第 1 次印刷

责任编辑：王佳玉 宋锦绣 责任校对：郑美玲

封面设计：李 雷

ISBN 978-7-5611-5368-0 定 价：25.00 元

前 言

笼统地说，文化是一种社会现象，是人们长期创造形成的产物。同时又是一种历史现象，是社会历史的积淀物。确切地说，文化是指一个国家或民族的历史、地理、风土人情、传统习俗、生活方式、文学艺术、行为规范、思维方式、价值观念等。

文化诸层次，在特定的结构、功能系统中融为统一整体。这个整体既是前代文化历史性的积累物，具有遗传性、稳定性，同时又在变化着的生态环境影响下，内部组织不断发生递变和重建，因而又具有变异性。“文化”既然是一个不断变化的生命过程，因此只有通过动态的“史”的研究，方能真正把握“文化”的真谛。

文化史就是以历史运动中的文化表现和文化锻造人自身的过程为研究对象的。文化史是史学的一个分支，是文化学与史学相结合的一门历史科学。作为史学一个特殊部分的文化史,有着自身的特殊研究范畴和使命。文化史是史学一个宽阔领域扩展的产物，它将人类文化的发展作为一个总体对象加以研究，从而与文学史、史学史、科学技术史、哲学史相区别。

日本文化史源远流长，绚丽多姿。本教材由日本岩宿文化开篇，至江户文化，共分为十个章节。为了配合日语专业高年级的其他课程需要，以及近年来不断增长的日语研究生考试需求，本教材全部采用日语表述。本教材既可以作为日语专业本科生高年级阶段的专业课教材使用，也可以作为研究生入学考试日本文化的参考书。课程按每周2课时开设，可满足1学期的使用。

《概说日本文化史》从2003年开始一直以试用教材的形式在日语专业的高年级教学中使用，由于各课的结构合理，各时期文化内容凸现、学习重点突出、多样化的配套练习题型,便于教师讲课和学生自主学习，几年来各方面都反映良好，社会效益显而易见。

在试用教材的基础上，我们于2007年上半年开始组织教材编写小组，在原有的基础上不断增补和修改内容，完善整体架构，使教材更加趋于完善。本教材从实用的角度出发，根据各课内容安排了大量的练习题，数量之多，内容之广，完全可以作为日语本科学生的专业课主干教材的辅助练习，也可以满足其他日语学习者的需要。各类型练习题均为编者多年从事日语教学的积累，能帮助学习者从各个角度、通过大量的练习来巩固自己的日语水平，书后附有练习的参考答案供检测时用。

本教材由刘小珊、陈访泽担任主编，写作历时两年，其他三位作者通力协作，在两位主编确定全书宗旨、编辑思想、章节构造，及刘小珊业已撰写的十个章节的教材初稿基础上,分工增补史料、完善书稿。其中，前言、第5章和第6章及全书的练习由刘小珊执笔，第1章和第2章由蔡京春执笔，第3章、第4章和第10章的部分内容由唐秀乐执笔，第7章和第8章由陈访泽执笔，第9章和第10章的部分内容由程亮执笔。此外，刘小珊担任全部章节内容的修改和审阅，陈访泽负责审阅和修改十个章节的语言表述，以及统一全书的体例。

由于本教材作者的水平有限，不足之处在所难免，敬请广大读者批评指正。

刘小珊

2009年6月于广州

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目　录

第一章　日本文化の曙——岩宿文化

第1節　日本列島の形成 …… 1
第2節　日本文化のはじまり …… 4
第3節　旧石器時代の文化と生活 …… 7
第4節　日本人の起源 …… 9
確認テスト1 …… 12

第二章　成熟した文化——縄文文化

第1節　縄文文化の成立 …… 15
第2節　縄文土器の特色 …… 18
第3節　縄文人の生業と衣食住 …… 20
第4節　縄文人の生活と信仰 …… 24
確認テスト2 …… 28

第三章　古代社会初期——弥生文化

第1節　弥生文化の成立 …… 31
第2節　弥生人の農耕生活 …… 33
第3節　弥生人の生活習俗 …… 36
第4節　弥生時代の金属文化 …… 39
確認テスト3 …… 43

第四章　君主制国家の形成——古墳文化

第1節　古墳文化の源流 …… 46
第2節　古墳文化の変化 …… 50
第3節　古墳時代の人々の生活 …… 53
第4節　大陸文化の受容 …… 56
確認テスト4 …… 60

第五章　国際色豊かな仏教文化——飛鳥文化
第1節　飛鳥文化の形成 …… 63
第2節　聖徳太子と太子政治理念 …… 72
第3節　大化改新と改新の詔 …… 76
第4節　白鳳文化の特性 …… 78
確認テスト5 …… 82

第六章　異国風な文化——奈良文化
第1節　国家仏教の隆盛 …… 85
第2節　遣唐使の派遣 …… 92
第3節　天平文化の特色 …… 95
第4節　天平の建築と美術 …… 98
確認テスト6 …… 101

第七章　華麗な王朝文化——平安文化
第1節　平安初期の政治と文化 …… 105
第2節　国風文化の形成 …… 110
第3節　浄土の信仰 …… 115
第4節　院政期の文化 …… 117
確認テスト7 …… 121

第八章　質実剛健な武家文化——鎌倉文化
第1節　鎌倉新仏教の興隆 …… 125
第2節　鎌倉文化の特色 …… 132
第3節　芸術の新傾向 …… 134
第4節　中日の文化と貿易の交流 …… 136
確認テスト8 …… 140

第九章　優雅な禅宗文化——室町文化
第1節　南北朝文化の特色 …… 144
第2節　室町幕府と明朝との交流 …… 146
第3節　室町文化の特色 …… 150
第4節　南蛮文化とキリスト教 …… 155
確認テスト9 …… 161

第十章　豊富多彩な文化——江戸文化
第1節　学問の新傾向 …… 165
第2節　宗教思想の発達と国学の萌芽 …… 172
第3節　元禄文化の形成 …… 178
第4節　洋学の発展と普及 …… 180
第5節　化政文化と民衆の生活 …… 182
確認テスト10 …… 187

解 答 編 …… 191

第一章　日本文化の曙――岩宿文化

（？～紀元前約6500年）

第１節　日本列島の形成

キーポイント

1. アジア大陸と地続きの日本

(1) 日本列島はもとアジア大陸と陸続きであった。

(2) 大陸と分離する前には旧象や大角鹿などの動物が生息していた。

(3) 約１万年前に大陸から完全に分離して日本列島が形成された。

2. アジア大陸との分離

約1万年前に、更新世から温暖な完新世になり、海水面が上昇して、日本はアジア大陸から切り離されて、ついに現在の日本列島が形成された。

3. 化石人骨の発見

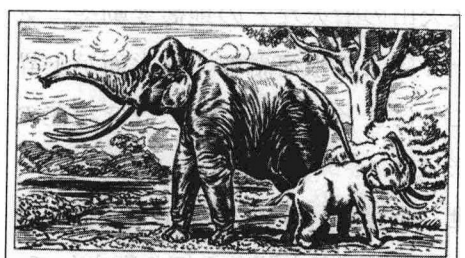
(1) 浜北人――静岡県浜北市で発見された旧石器時代の化石人骨である。

(2) 港川人――沖縄県具頭村で発見された旧石器時代の化石人骨である。

(3) 他に葛生人、三ケ日人、聖岳人などがある。

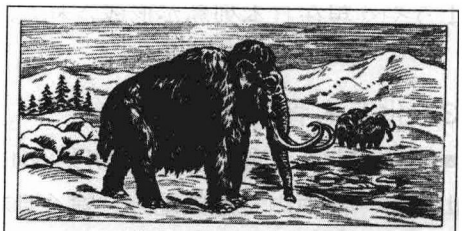
1．アジア大陸と地続きの日本

日本史を紐解くならば、まず初めに出てくるのが国土の成り立ちである。今から約3600万年～約2500万年前、これは「歴史」というより「地質学」の範疇であるが「第三紀（漸新世）」と呼ばれる時代、日本列島は影も形もなかった。



ナウマン象（左）とアオモリ象
（『図説日本文化史大系』より）

それ以前の30万年前～20万年前、日本は北海道と樺太、九州と朝鮮半島がそれぞれ陸続きになっていて、日本海は巨大な湖となっていた。この時期は、一般的に氷河期と呼ばれた時期に相当する。それが何億年にもわたって陸地の隆起と陥没が繰り返され、ある時期には海没し、ある時期には大陸の地続きとなり、激しい変動を示したのであった。



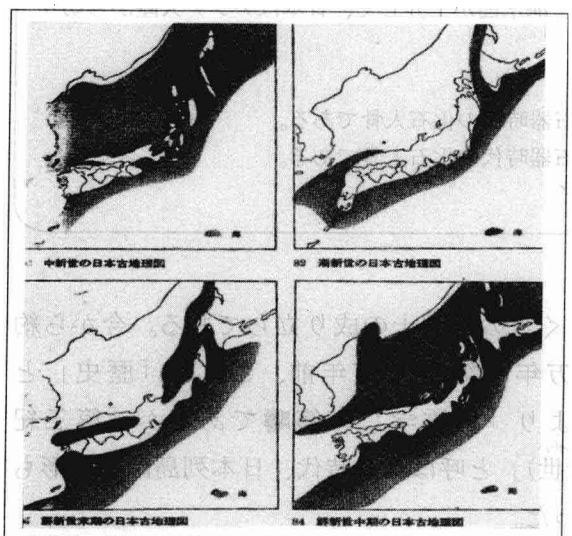
マンモス象（『図説日本文化史大系』より）

そして、更新世に入ると、氷河の発達によって寒冷な氷期とその間の温暖な間氷期が断続的に襲い、更新世の終わり頃には火山活動が激しくなり、噴出した火山灰が堆積して、赤土のローム層が形成された。

日本列島がアジア大陸から分離する前には、北方から来たマンモス象や、南方から来たナウマン象などの旧象や、大角鹿などの生息がその化石の発見によって知られた。この時代の人類は主に狩猟を行い、動物を追って居住地域を転々としてきた。未だ定住生活を行わない人類は、ユーラシア大陸から獲物を求めて日本列島の原型地点までやって来たと考えられる。それを証明する史料として、日本各地で約2万年前の人骨が見つかっており、天然の洞穴などに身を潜めて暮らしていたと思われる港川人や、三ケ日人と浜北人がそれである。

2．アジア大陸との分離

鮮新世末期が終って更新世（洪積世）に入ると、日本の古地理は一変した。更新世早期から前期にかけての頃には、日本のまわり一帯が広範囲にわたって陸化し、東海陸地によってアジア大陸ばかりでなく、フィリピンやジャワなどとも陸続きになっていた。後期の終りに近いころになると、東海陸地は沈水し朝鮮海峡もできたらしく日本の島々は大陸から分離したものと考えられている。



漸新世―中新世―鮮新世中・末期（『図説日本文化史大系』より）

3万年前～1万年前になると、大地震や海底火山の噴火などの地殻変動や、気温の上昇による氷河融解で海水面が上昇したことによって、世界は、ほぼ現在の大陸形成になっていく。約1万年前に、更新世（洪積世）から温暖な完新世（沖積世）と呼ばれる時期になり、海水面が上昇して、日本はアジア大陸から切り離されて、ようやく現在日本列島が形成された。

3．化石人骨の発見

☛日本の化石人骨　日本列島は火山列島とも呼ばれるように更新世の火山噴火による火山灰が、瀬戸内、近畿地方を除く日本列島の大部分に降り注いだので骨を分解してしまう酸性土壌の占める地域が多く、旧石器時代の遺跡に人骨や獣骨の化石が残る例はほと

んどない。こうした中でもこれまで洪積世人類化石として知られていた例も多かった。

○**浜北人**・・・1961～1962年に静岡県浜北市の岩水寺採石場・根堅洞窟で発見された旧石器時代の化石人骨である。縄文人と類似した形質から、その祖形と推測される。現在は東京大学の総合資料館に保管されている。

浜北人骨（1万8000～1万4000年前）
浜北市根堅遺跡出土（東京大学総合研究博物館蔵）

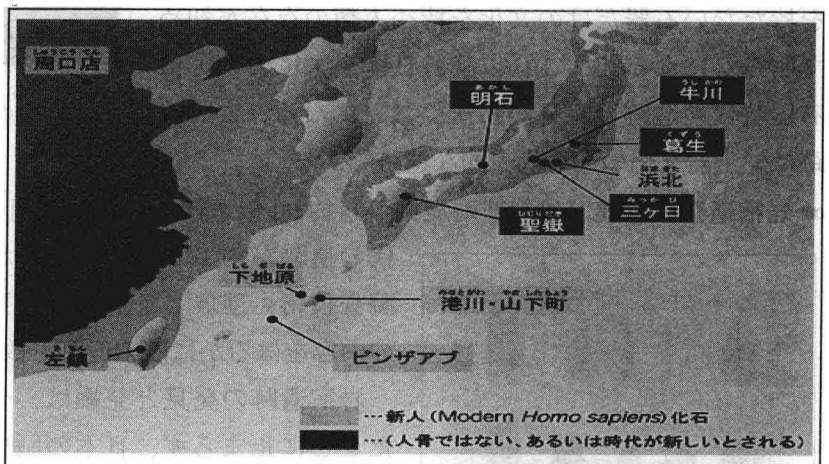
○**港川人**・・・およそ1万7000年前に存在していたとされている人類である。1967年、沖縄県具志頭村港川の海岸に近い石切場で骨が発見された。この人骨は、約1万7000年から1万8000年前のものだと推定され、日本人のルーツとされている。

☛これまで更新世人類として知られていた人類化石

葛生人は、栃木県葛生町で1950年代に発見され、元早稲田大学教授直良信夫によって更新世人類と考えられた。

三ヶ日人は、1959年～1961年に静岡県三ヶ日町（現浜松市）の石灰岩採石場から発見され、後期更新世人類と考えられたが、放射性炭素年代法により9000年前の縄文時代早期の人骨と分かった。

牛川人は、1957年に愛知豊橋市牛川鉱山で発見され、東京大学名誉教授鈴木尚によって中期更新世人類（旧人）と考えられたが、人骨の特徴を備えていなかった。



化石人の分布

聖岳人は、1962年に大分県本匠村聖岳洞穴で発見され、元新潟大学教授小片保によって中国の山頂洞人と似ているとされたが、形態面や年代推定から歴史（江戸）時代に属する可能性が極めて高くなった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第２節　日本文化のはじまり

キーポイント

1. 岩宿遺跡の発見

(1) 1946年に、当時在野の考古学者であった相沢忠洋によって発見された。

(2) 日本にも「旧石器時代」があったことを証明する大発見である。

(3) 相沢忠洋は「日本旧石器時代の父」と呼ばれている。

2. 日本の旧石器文化

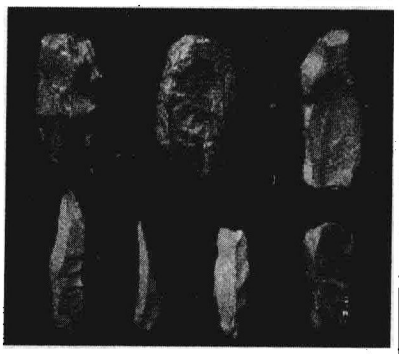
(1) 岩宿遺跡の発見により日本先土器文化の存在が解明された。

(2) 人々は黒曜石で打製石器を作って使用していた。

(3) 石器は握槌、ナイフ形石器、尖頭器、細石器などの種類がある。

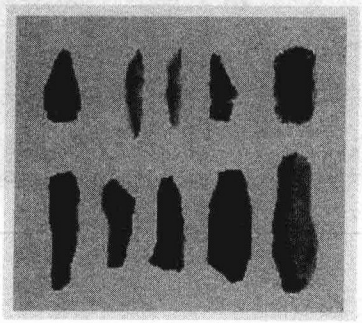
１．岩宿遺跡の発見

☛岩宿遺跡　岩宿遺跡は、群馬県みどり市笠懸町（かさかけまち）にある旧石器時代の遺跡である。1946年に、当時在野（ざいや）の考古学者であった相沢忠洋（あいざわただひろ）によって発見された。この発見によって、日本の旧石器時代の存在が証明された。つまり、遺跡で発見された石器は調査の結果、3万年前のものと分かり、これによって、日本に土器を持たない石器だけの文化を持つ人類の存在が初めて明らかになった。これ以降、日本全国において旧石器時代の遺跡の発見が相次ぐことになる。この遺跡は先土器文化の最も代表的な遺跡である。



岩宿Ⅰ石器文化（約3万年前）
最初の発掘調査で出土した石器
（明治大学博物館蔵）

☛岩宿遺跡の意義　岩宿遺跡発掘から約60年を経て、日本全国には岩宿（旧石器）時代の遺跡が約1万ヶ所も知られている。研究方法も調査技術も進展し、多くの大発見もあり、岩宿遺跡の内容をはるかに凌（しの）ぐ遺跡も数多いと言える。



岩宿Ⅱ遺跡出土石器（明治大学博物館蔵）

岩宿遺跡の発見と発掘は、一つの遺跡が発見されたことに止まらず、日本の歴史がどこまで溯るのかという最古の歴史研究の扉を開き、縄文時代以前に日本最古の一時代があることを証明したからである。このことが、その後の岩宿時代研究の出発点となり、日本考古学史上でも欠くことのできない大発見とされる理由である。

☛相沢忠洋の貢献　日本の考古学者相沢忠洋は、納豆などの行商をしながら独学で考古研究を行っていた。日本で最初に赤土の関東ローム層の中に人類の文化が存在することを立証した岩宿遺跡の発見者であり、「日本旧石器研究の父」と呼ばれている。

出土の石器を芹沢長介先生と検討する相沢忠洋（左）
（『相沢忠洋記念館ホームページ』より）

1946（昭和21）年、相沢は岩宿の切り通し関東ローム層露頭断面から、石器（細石器）に酷似した石片を発見した。ただし、旧石器と断定するまでには至らず、確実な旧石器を採取するため、相沢は岩宿での発掘を独自に続けていった。

1949（昭和24）年夏、相沢は岩宿の関東ローム層中から明らかに人為と認められる槍先形石器を発見した。この石器を見せられた明治大学院生芹沢長介（当時）は、同大学助教授杉原荘介（当時）に連絡した。これを受けて、同年秋、明治大学が岩宿遺跡の本格的な発掘を実施し、その結果、旧石器の存在が確認され、日本における旧石器時代の存在が証明されることとなった。

2．日本の旧石器文化

☛日本の旧土器文化　1946年に、考古学者相沢忠洋によって、群馬県岩宿の更新世末期の関東ローム層から土器を伴わない打製石器が発見され、1949年に発掘調査されたのは画期的なことであった。以後、各地の更新世地層から同様な遺跡の発見と発掘が相次ぎ、縄文文化に先立つ土器を伴なわない旧土器文化（先縄文文化・先土器文化）が解明され始めた。

☛石器群の編年

〔Ⅰ期〕複雑な礫器。不定形な剥片、のち楕円型石器＝握槌。

〔Ⅱ期〕ナイフ形石器。約5cm、用途・機能による形態差と原石種類による形態差の局部磨製石斧。

〔Ⅲ期〕槍先形尖頭器。入念な調整加工。

〔Ⅳ期〕細石器。細刃器、長さ2cm～3cm、幅1cm、新石器時代への移行期「中石器時代」とも言う。組み合わせて木・骨・角の軸に刃としてはめて使用。北海道と西九州の2ルートより流入。

3．旧石器文化の特色

☛土器の出現　これまで土器は縄文時代草創期が最古のものであった。福井2層～4層の土器は、日本で初めて発掘された旧石器時代の土器である。これを機に、土器製造の

歴史を遡る調査研究が盛んになった。

旧石器時代の終末に、九州では豆粒文土器、本州では無文土器が出現している。北海道では本州よりも少し遅れたとされる。北から来たのに、南で発達するという一見矛盾する現象は、その出現の契機と発達の背景とが異なることを意味している。南九州でいち早く発達した様子が知られていることから、それには気候の寒暖と植生の違い、ひいては生業内容の違いが関係したと推測されている。

一般に土器は、運搬、貯蔵、煮炊きに使われるが、出現期の土器の役割はまだ十分解明されていない。

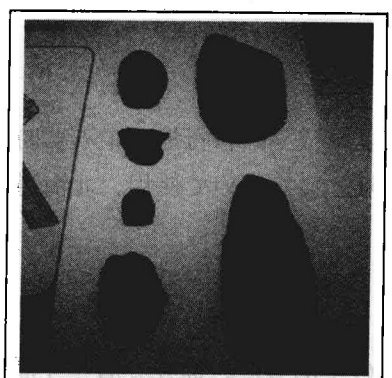
黒曜石石刃
(1万7000年前) 白滝・幌加沢遺跡出土
(札幌大学埋蔵文化財展示室蔵)

☛黒曜石　旧石器時代には、石を打ち欠いただけの石器を用いたが、この時代の終わりには細石器と呼ばれる小型の石器も用いるようになった。細石器は木や骨の柄に嵌め込んで使用した。この当時の武器といえば、石材を打ち砕いて作った「打製石器」である。主な打製石器の原料として使われたのが黒曜石と呼ばれる石で、加工が容易ながら耐久性に優れ、鋭利な断面を作れる石器にうってつけの石材である。黒曜石から作られた打製石器の確認例は長野県の野尻湖遺跡、上ノ平遺跡や群馬県の岩宿遺跡が有名である。これ以外にも全国各地から出土しており、旧石器を用いた人類が広範囲に生活していたことが分かっている。

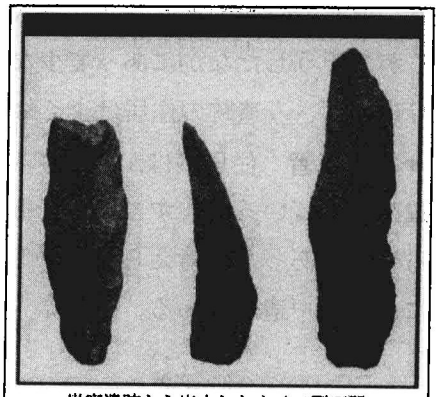
☛石器の発展　旧石器時代において使われた打製石器の発展は握槌→ナイフ形石器→尖頭器→細石器という流れである。

○ **握槌**・・・握斧、楕円形石器とも呼ばれ、扁平な円礫あるいは大きな礫を打ち割った剥片の周辺を打撃して形を整えたものである。直接手に持ちあるいは柄をつけるなどして、主に樹木の伐採や土掘り、農耕用として使われた。

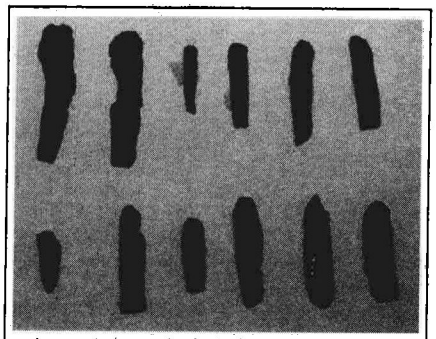
○ **ナイフ形石器**・・・旧石器時代後期に特徴的な、石刃などの剥片に刃潰し剥離を加え、現在のナイフに似た形に仕上げた石器である。石刃技法の普遍化とともに現れた石器であり、切り出し小刀のように鋭い刃と先端をもつ突刺形のナイフ形石器と、カッターナイフにも似た切截形のナイフ形石器とがある。そのほとんどは毛皮や肉、樹皮などを切るために用いられ、磨製の刃よりも格段に鋭利であった。旧石器時代の時期区分や文化の発展段階を検討する上で、槍先尖頭器や細石器とならんで重要な役割を果たしている。


斧形石器(杉並区立郷土博物館蔵)

○ **尖頭器**・・・先端を鋭く尖らせた打製石器のことで、日本では、尖頭器は旧石器時代のナイフ形石器の盛行期（約2万年前から1万5000年前まで）に出現している。木の柄につけて投げ槍とし、当初はマンモスなどの大形獣を対象とした狩猟具として生まれたが、洪積世末期に海進によって大陸から切り離され、大形獣の絶滅が早かったという特殊な条件が加わって、イノシシやニホンジカなどが主な狩猟対象となった。これらの、嗅覚が鋭く行動の機敏な動物の捕獲には、手持ちの槍よりも投げ槍が狩猟具として適していたものと考えられ、特に有舌尖頭器の急増は、こうした事情を物語っていると推定される。


岩宿遺跡から出土したナイフ型石器
（明治大学考古学博物館蔵）

○ **細石器**・・・打製石器の一種で、小型かつ刃の特徴を持つ石器である。文字通り小型の石刃であり、骨や木の軸に掘られた溝に並べてはめ込み、各種道具の機能部を構成する。同じ形の石刃でもはめ込む軸の大きさや形状によって異なる機能と用途を持った道具を作ることができる。旧石器時代中期から存在するが、押圧剥離による組織的な細石刃技法の出現は旧石器時代後期に特有である。細石刃石器群を出土する遺跡は北海道から九州まで約500ヶ所ほど知られている。


細石刃（1万7000年前）白滝・幌加沢遺跡出土
（札幌大学埋蔵文化財展示室蔵）

第3節　旧石器時代の文化と生活

キーポイント

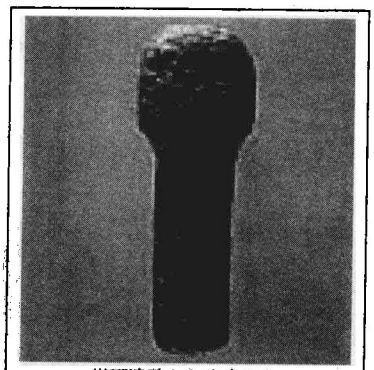
1. **原始の風習**
   (1) 住居――少ないながら竪穴住居が確認されている。
   (2) 埋葬――墓とみられる土坑墓が発見された。
2. **原始の芸術**
   (1) 芸術品と装飾品――隆起文や豆粒文の土器と飾り物と見られる玉器などが発見された。
   (2) 抜歯――歯が抜けている港川人の化石人骨が発見された。

1．原始の風習

☛**住居**　日本列島の旧石器時代の遺跡は、日常生活の場としての拠点遺跡、獲物の解

体場遺跡、石器製作場遺跡などがある。定住住居跡の出土例が少ないことから、旧石器時代の人は、一定の生活領域内を移動しながら採集狩猟生活をしていたと考えられている。旧石器時代の人々は多く洞穴や岩陰を住みかとして利用していたことが知られているが、そうしたなかにあって少ないながらも竪穴式住居が見つかっている。大阪府藤井寺市のはさみ遺跡の住居はよく知られている。

☛埋葬風習　住居のほか、はさみ遺跡梨田地点から、墓と推定される楕円形の土坑墓が確認されているが、すでに土を掘り窪めて穴をつくり、そこに人の遺体を納めて葬送する習慣があったと考えられている。代表的な遺跡の一つとして大分県豊後大野市清川町にある岩戸遺跡がある。



岩戸遺跡から出土した
約2万年前の『こけし形』の人形
（東北大学総合学術博物館蔵）

2．原始の芸術

☛芸術品と装飾品　数多くの遺跡から出土した遺物の中からこの時期の芸術の影がうかがわれる。1961年に愛媛県美川村で発見された上黒岩岩陰遺跡は、縄文時代早期を中心とする岩陰遺跡である。出土品は縄文草創期から後期まで1万年近くにわたるが、草創期から早期の出土品に貴重なものが多い。

女神像線刻礫や、投槍のささった腰骨、土器、矢じり、石器、多数のよく保存された人骨などが発見された。「ビーナス像」とも称される女神像線刻礫は、鋭い石器のようなものを使って女性像を礫に描いたもので、長い髪・大きな乳房・こしみの・かすかにわかる逆三角形を、鋭い石器などで小さい緑泥片岩に描いてある線刻像は信仰の対象だったと考えられている。

さらに、岩宿文化の遺跡からは当時人類の美意識が現される装飾品も数多く発見された。例えば、岩戸遺跡から発掘した海産の貝殻片、北海道美利河遺跡（ピリカ遺跡）から出土した日本最古とされる装身用の玉製品などは、全て飾り物だと考えられている。

☛抜歯の習慣　1968年、沖縄で「港川人」が那覇市に住む市民研究者大山盛保氏によって発見された。発見された港川人の化石人骨のうち4人分（男性1人分・女性3人分）は全身骨格のかなりの部分がそろっており、一つの注目点はその中に女性化石の下顎骨真中の前歯2本が抜けていることであった。抜歯の習俗は縄文時代によく見られるようになり、男性が成人前、或は女性が結婚前に行われたものである。もし、港川人の歯も風習によって抜かれたものであれば、この地方において最も古い抜歯の実例になることは言うまでもない。

第４節　日本人の起源

キーポイント

1. **日本人の人種的起源**
   (1) 混血説——現日本人は原日本人と新モンゴロイド系の人と混血を重ねつつ形成された。
   (2) 北京猿人説——北京猿人が東へと移動し、最終的に日本最古の住民となった。
2. **日本語の系統**
   アルタイ語起源説、高句麗語起源説、朝鮮語起源説、混合語起源説などがある。
3. **日本原始文化の系統**
   日本原始文化は複合的な文化から形成されている。

１．日本人の人種的起源

☛混血説　日本の石器時代人と、現代人とでは、骨などの身体的特徴が、かなり違う。この違いを、「混血説」では、大陸などから人が渡ってきたことによる「混血」に基づくと考える。現在の日本人種はこの古モンゴロイド系の原日本人が、大陸や南方から渡来した新モンゴロイド系の人々との混血を重ねつつ、生活環境の変化に伴なう体質的変化を遂げながら形成されたと考えられている。

☛北京猿人説　第三紀氷河期の頃、北京周口店（しゅうこうてん）末期猿人の一部が猟物を追ううちに、華北地方から次第に東への移動し、最終的に日本最古の住民になったと推測された。中国の古生物学者である裴文中（はいぶんちゅう）によれば、同時期の中日両国の遺跡を比較した結果、日本九州早水台（そうずだい）遺跡の石器の種類やその加工技術は北京周口店第 15 地点の文化遺物と「多くの共通点がある」といい、大量の実例で「北京猿人説」に重要な根拠を提供した。

２．日本語の系統

日本語の系統は、研究者にとって非常に興味のある話題の一つである。日本語はどこからきたのか、どの言語と同系であるか、ということはしばしば話題にのぼり、各自がまことしやかな意見を述べて議論を戦わせることがある。

アルタイ起源説

☛アルタイ起源説　日本語の文法的構造や音韻の特徴は、中央アジア、東アジア、シベリア方面一帯に分布しているウラル・アルタイ語族に最も近い。アルタイ語族仮説を支持する学者のうち、極東アジアの言語の起源に関心を持つ内外の言語学者の多くが、日本語と朝鮮語がアルタイ起源であることを証明しようと多くの努力を払ってきた。日本においても傑出（けっしゅつ）したアルタイ諸語の研究者が輩出（はいしゅつ）し、彼ら

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com